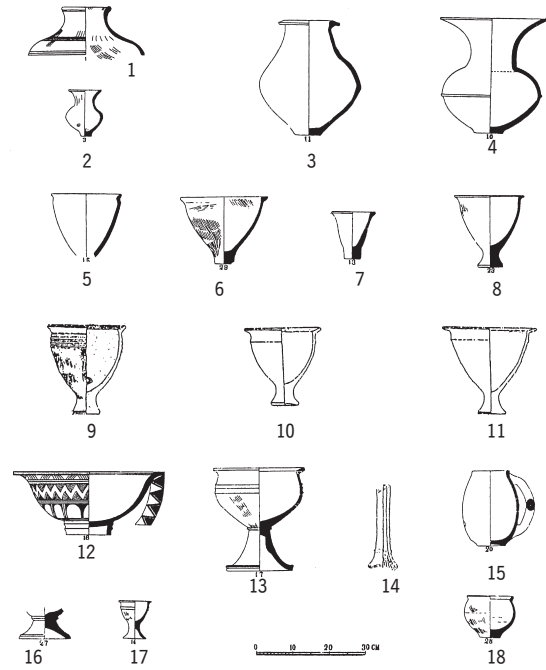


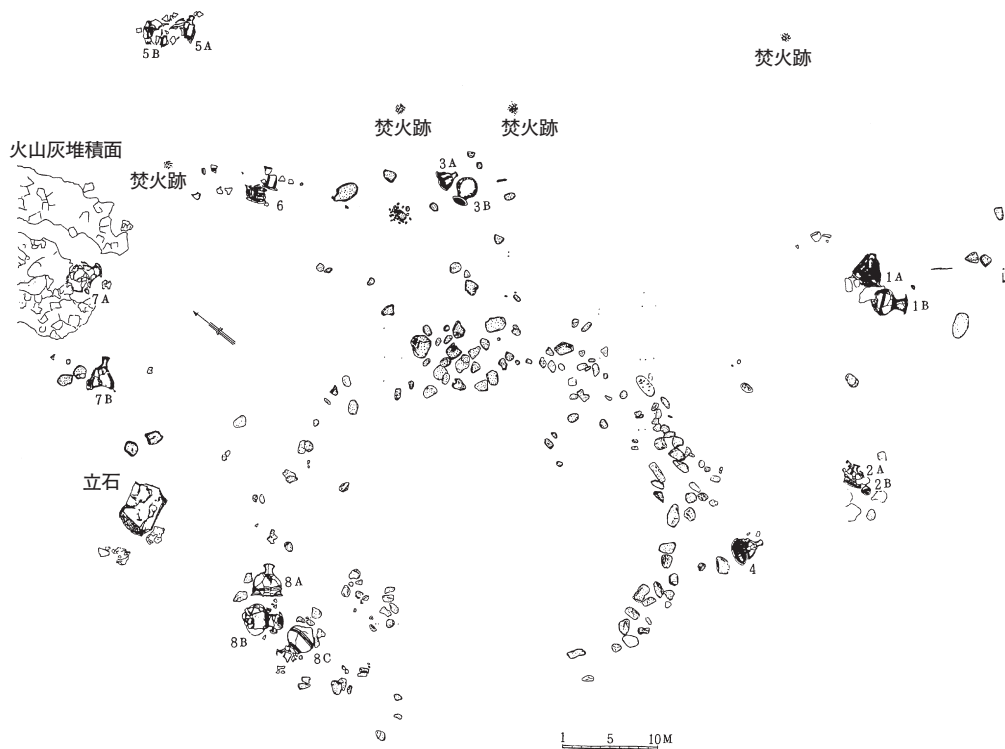
写真1 山ノ口遺跡A地点出土の軽石製品



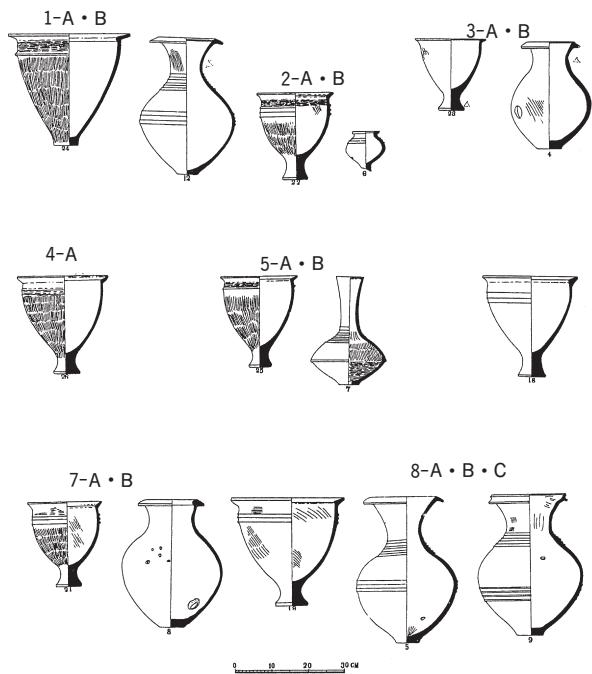
第3図 山ノ口遺跡A地点出土の土器

中の二つの条件の元に発見されている。地下1mは、発掘によって、開聞岳起源の暗紫グラの直下に当たることが判明した。

A地点から出土した遺物には、祭祀に用いられた軽石製の岩偶と家形という、当時の社会を特徴づける極めて珍しい祭祀具が見付かっている。写真1—2は高さ37cm、幅18cm、厚さ10cm、頭部は両耳が張



第4図 山ノ口遺跡B地点配石遺構



第5図 山ノ口遺跡B地点配石遺構の土器

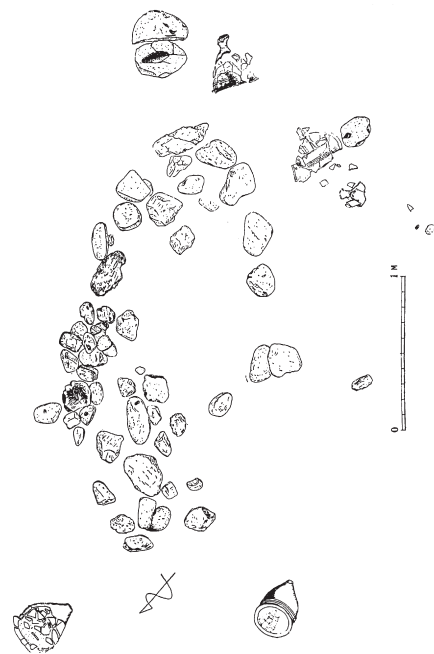
りだして、穴をあけ耳輪を嵌めていたことを示し、目と口を窪め、鼻は高く彫り出して、男性の表情を現し、胴部以下は細く削り砂浜に立てるように作られている。写真1-1は高さ27cmと、一回り小さく、頭部はオカッパ風の髪形で、二か所括り、楕円形の顔に目鼻を彫り、肩は張り出して、胸に乳房が張り出して女性を示し、底部に縦穴を穿って棒を嵌め砂浜に突き立てて祭りを行った、両性の岩偶を供献する特殊な祭りが行われた事を示している。

写真1-3・5は軽石製家である。5は高さ21cm、3は高さ40cmである。家を供献したのは家が重要な集落の要であったことを示すものであろう。

第3図の土器のうち12は地表下3mの深い砂鉄層から出土した土器である。口径30cmを越える大きな高杯の杯部である。脚部は折損して見られない。

器面は内外ともに研磨され、外面は丹塗で鋸歯文など美しく飾られ、口縁部上面は黒色の鋸歯文を施した見事な土器である。この遺跡で最も古い土器で、弥生前期のものと思われる。1の土器がこの土器に最も近い時期のものであろう。この二つの土器は山ノ口遺跡の全盛期以前の時代があったことを示すものである。

第3図の1・12以外の土器は、地表下1mの開間岳起原の暗紫ゴラ直下から、暗紫ゴラが膠着して出



第6図 山ノ口遺跡C地点楕円形配石遺構

土した土器である。第二次の開間岳噴火の時期に、環状配石に供献されていた土器群で、優に2000年を越える弥生中期の土器である。

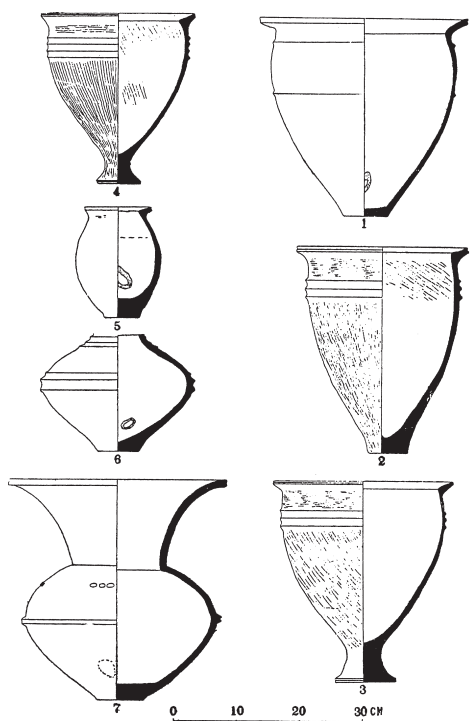
B地点の遺構遺物

第一次調査によって、B地点の地表下1mの純粹砂層上に、内径約3mの軽石礫の環状配石を中央にして、周囲に甕形土器・壺形土器をセット、或は単独で配石を囲むように15個の土器を配置している。環状配石の西南部は、最初の砂鉄採掘時に試掘して配石の一部が削り取られ、ここから4個の土器が出土したという。したがって環状配石に供献された土器は、本来19個であつた。

環状配石の中央には、陰石をふくむ軽石礫3個が埋められ、配石内には素朴な軽石製岩偶も出土した。また、配石周辺には軽石製の呪具・占具が配置され、東側と西側の土器に添ってスレート製の磨製石鏃が数個づつ供献されており、配石とやや距離を置いて西側（海側）には高さ52cmの安山岩の角柱が安置され、東側には七か所の焚き火の跡が、土器など諸々の供え物をした祭りの跡を偲ばせる。

B地点の環状配石に沿って供献された土器

壺と甕のセットで、山ノ口式の標準となる土器である。地表下1mの砂鉄層の直上から、開間岳の第2次爆発による火山灰（暗紫ゴラ）に被覆されて出



第7図 山ノ口遺跡C地点出土の土器

土した。土器には暗紫ゴラが膠着して、第2次爆発時に地表に存在したことを示している。壺形土器には有文と、無文とがあり、とくに口唇部が二叉に別れる器形は山ノ口式以前に現れ、以後まで残る。特殊なものとしては長頸壺と、脚台付き小形壺がある。甕形土器は充実した脚台が特徴であるが、異例の平底土器が出現している。

磨製石鏃はこの時期に盛行し、軽石製勾玉は地域独特のもので、祭祀のために作られたものであろう。

C地点の遺構遺物

第2次の調査で、楕円形配石遺構が発見された。地表下1mの砂鉄層上面に、軽石礫を長さ2.84m、幅1.60mの楕円形配石遺構である。主軸は北西—南東方向で、四辺に須玖II式を含む甕形土器4個を配したものである。この遺構の主体は、配石の東端30cmに埋置した軽石製陰石である。大きき34cm、軽石の蓋で覆い、その上に更にスレート石板を被せ、スレート面を丹塗したものである。

第7図C地点出土の土器の内、1～4は楕円形配石遺構の供献土器である。1は丹塗磨研の須玖II式、2は脚台付き甕形土器に移行した南九州で、平底という逆行現象を示す土器である。軽石製勾玉はC地点出土であるが、頭部の孔は貫通しておらず、儀器



写真2 山ノ口遺跡D地点の立石

である。

D地点の遺構遺物

出土遺構は、北西側の崖に近く、立石(写真2中央)は本来の姿のまま、唯一、立った状態で発見された。角柱状の安山岩で、下端より25cmの地表部分の四つ角に、埋め込みの目印の削込みがみられる。地上に露出していた部分は、風蝕を受けており、特に海側の面は腐食が甚だしい。此处では、この立石が祭祀の対象であった。

軽石の環状配石が四か所に設けられ、各所に、壺形土器・甕形土器・浅鉢形土器など7個が配置され、磨製石鏃もみられ、中程に焚き火の跡があり、軽石製人面が供献されている。

まとめ

山ノ口遺跡は、幅20m余、長さ50m余の山ノ口旧砂浜(二千余年前)に構築された大小の環状配石からなる、弥生中期の祭祀遺構である。所属年代が明確であり、絶対年代に基づく弥生時代編年の基準となる重要な遺跡である。

A～D地点の遺構は同一文化圏内のそれぞれの集落の共同祭祀のあとである。ほかの文化圏から齊らされた土器も交えて供献を行い、土器タイプの有様にも重要な示唆を与え、すべての遺物に暗紫ゴラの付着によって絶対年代を明らかにした事は、文化の解明に大きな手掛かりを与えた。

資料の所在

出土遺物は、河口貞徳宅に保管されている。

参考文献

河口 貞徳1960『鹿児島県文化財調査報告書』7

(河口貞徳)